令和６年度 青少年交流事業

アメリカ・ヒューストン市派遣

帰 国 報 告 書

公益財団法人千葉市国際交流協会

目 次

１．派遣概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

２．滞在日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

３．研究レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

（１）地球温暖化対策に対する認識と取り組みの現状

雨宮　幸輝

（２）アメリカの食

加藤　葵

（３）日本とアメリカのお留守番事情

守　晶羽

（４）日本とアメリカの家族に関する比較調査

山口　想蒔

４．滞在感想文（日本語／English）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

（１）ヒューストンで学んだこと／To study in Houston

雨宮　幸輝　Koki Amemiya

（２）たくさんの笑顔が生まれた 10 日間／10 Days Filled with Smiles

加藤　葵　Aoi Kato

（３）家族時間／Family Time

守　晶羽　Akiha Mori

（４）百聞は一見に如かず／Seeing is Believing

山口　想蒔　Yamaguchi Soushi

（５）運命の赤い糸／The “Red String of Fate”

千葉市立千城台南中学校 教諭 根本 哲和（引率者）

Chaperone Yoshikazu Nemoto

５．記録写真（思い出の写真）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

１．派遣概要

（１）派遣都市　　　アメリカ合衆国・テキサス州 ヒューストン市
（２）派遣期間　　　令和６年８月１４日（水）～令和６年８月２５日（日）
（３）派遣者　　　　中学生４人、引率者１人
（４）滞在形態　　　一般家庭にホームステイ
（５）現地受入機関　ヒューストン日米協会
　　　　　　　　　　Japan-America Society of Houston（略称 JASH）
（６）現地受入校　　River Oaks Baptist School（略称 ROBS）

２．滞在日程

日　付	時　間	内　容
8 月 14 日(水)	13 時 45 分	成田空港第 1 ターミナルに集合
	16 時 45 分	成田空港発　ユナイテッド航空 006 便
	<現地時間>	
同日	14 時 50 分	現着(入国手続き～16:05／JASH 事務所に移動～17:15)
	17 時 30 分	ホストファミリーとの初顔合わせ会を行い家庭ごとに解散
		［資料１］空港(IAH)到着 ［資料２］現地家族と対面
8 月 15 日(木)	10 時 00 分	BUFFALO BAYOU CISTERN ART SHOW
	11 時 30 分	LUNCH: Teotihuacãn　MEXICAN CAFÉ
	13 時 00 分	Volunteering at Houston Food Bank
		［資料３］警察官と撮影 ［資料４］ボランティア活動
8 月 16 日(金)	10 時 00 分	Mural Art in Houston
		DISCOVERY GREEN
		GEORGE R.BROWN Convention Center
	11 時 00 分	LUNCH: RODEO GOAT

	12時00分	Minute Maid Park ［資料５］ミューラルアート　［資料６］ﾐﾆｯﾂﾒｲﾄﾞﾊﾟｰｸ
8月17日(土)	／	Free Day（ホストファミリーごとの活動）
8月18日(日)	／	Free Day（ホストファミリーごとの活動） ［資料７］ボランティア　［資料８］野球観戦
8月19日(月)	10時20分 12時10分 13時30分	ヒューストン市庁舎 LUNCH: Chick-fil-A Color Factory ［資料９］ヒューストン市庁舎　［資料10］カラーファクトリー
8月20日(火)	10時00分 12時00分	NASA SPACE CETER LUNCH: FOOD LAB ［資料11］NASA_1　［資料12］NASA_2

8月21日(水)	11時00分 13時00分 14時15分	MUSEUM OF NATURAL SCIENCE LUNCH: TBD THE MUSEUM OF FINE ARTS [資料13] Science Museum　[資料14] Art Museum
8月22日(木)	8時00分	River Oaks Baptist School [資料15] 学年始めの学活　[資料16] 英語(国語)の授業
8月23日(金)	8時00分 18時00分	River Oaks Baptist School 在ヒューストン日本国総領事館 [資料17] ROBSの校長先生　[資料18] 日本国総領事館
8月24日(土)	10時45分	ヒューストン空港発　ユナイテッド航空007便
8月25日(日)	<日本時間> 14時00分	帰国

３．研究レポート

地球温暖化対策に対する認識と取り組みの現状

雨宮　幸輝

【テーマ選定理由】

世界的に大きな問題となっている地球温暖化に対して日米はともに Co2 削減目標をパリ協定で設定し取り組んでいる。しかし、現状において、その達成は容易ではなく、達成したとしても地球温暖化解決とはいえない。

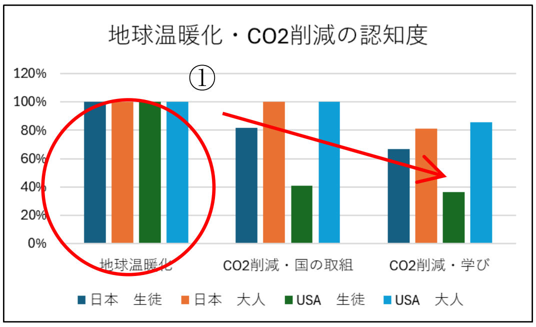
千葉市とヒューストン市は共に石油化学工業が発達しており、各国を代表する都市で各市での取り組みはその達成に大きな影響を与えると考えた。そこで、そんな都市の Co2 削減に対して、住民レベルでの認識や取り組みの現状を調査することで、世界全体での課題 Co2 削減に何か寄与できるヒントはないか考察しようと思った。

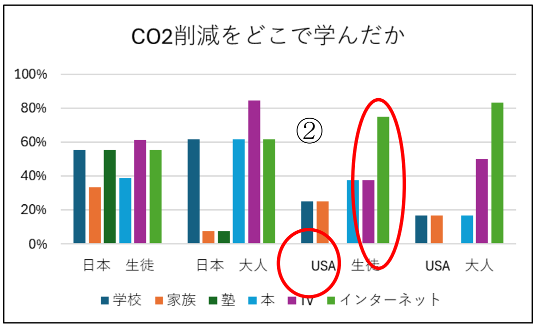
【研究内容】　地球温暖化対策についてのアンケート
各市での Co2 削減に対しての取り組みを比較

【研究方法】　アンケート実施と滞在中の観察など

○千葉市立緑町小学校 6 年生	(11～12 歳)	27 名
○千葉市民	(20 歳以上)	16 名
◎River Oaks Baptist School	(11～12 歳)	22 名
◎ヒューストン市民	(20 歳以上)	7 名

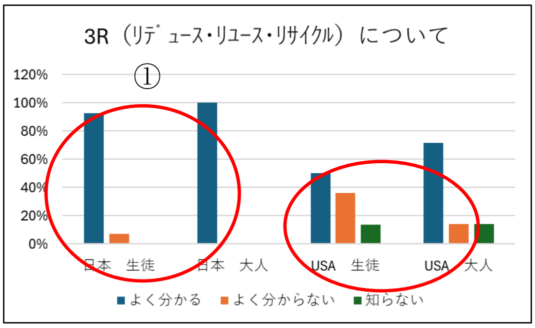
【研究結果】

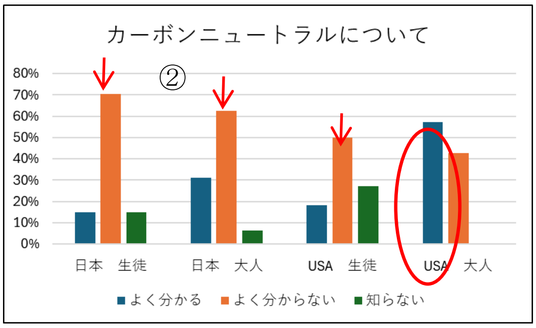




①地球温暖化問題は日米共通で全員認知されていたが、Co2 削減の各国の取り組みや、その学びについては徐々に認知度が下がった。

②アメリカでは学校では Co2 削減等を授業や家庭で取り扱うことが少なくインターネット等から知識を得ている。

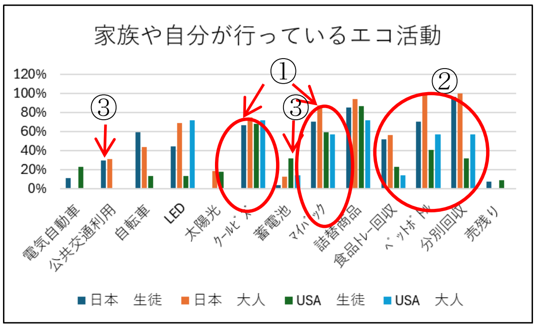


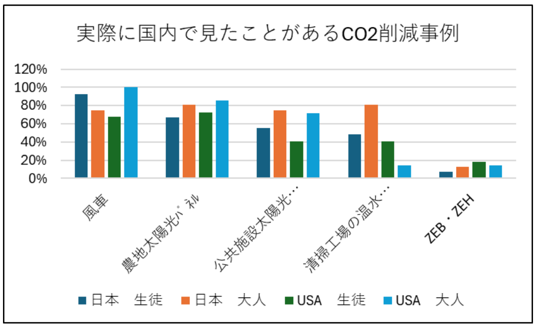


① 3R(リデュース・リユース・リサイクル)については日米での認知度の違いが大きい。

→日本では学校の授業や TV 等でしっかり内容まで周知されている。

② 一方でカーボンニュートラルについて、日米ともにその言葉は知っているが内容はよく分からない人が多数(アメリカの大人を除く）。内容の認知度が低い。



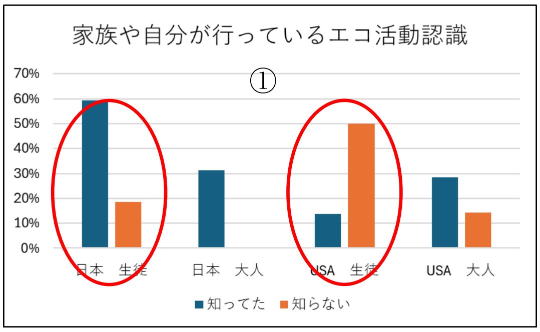


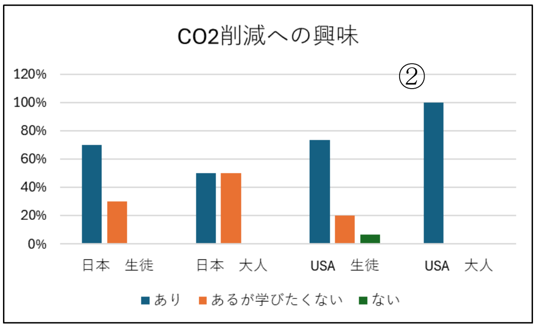
① 家族や自分が行っているエコ活動について、日米ともに行っている内容は、クールビズ・マイバック利用・詰め替え商品の利用があった。

② 日本で積極的なエコ活動は食品トレー・ペットボトル回収や分別回収だった。

　→日本での３Ｒ認知度が高いことが活動に繋がっているのではないか

③ アメリカでは電気自動車や家庭での蓄電池などの設備の利用が多い。





① 家族や自分が行っているエコ活動の認識は、日本の生徒は認識している割合が高いが、アメリカの生徒はエコ活動とは認識せずにしている割合が多かった。

② また日米とも、Co2 削減への興味はあるものの、積極的に学ぶというところまではいかない人もいた。

【考察】

アメリカも日本も地球温暖化が大きな問題となっていることはすべての人で認識があった。一方で３R、カーボンニュートラルとなると、どんどん認知度は下がる。その学びは日本では、塾や学校であるのに対して、アメリカでは 11 歳の時点まででは学校や塾で Co2 削減について学ぶことは少ないようで、情報源はインターネットが多かった。また、Co2 削減の取り組みは、電気自動車の活用はアメリカが多かったが、ペットボトル回収や食品トレー回収などは日本の半分程度。自転車や公共交通機関の積極的な利用もアメリカは少なかった。そして、日本は意識してこういったことを行っているのに対してアメリカの子供は、普通にやっていることが Co2 削減に繋がっていた、といった感覚のようであった。ただ、両国とも Co2 削減に対して関心はあるようだった。

【アメリカに行き実際に見たこと聞いたこと】

・家庭内のごみ箱でのごみの分別。プラスチック・紙・金属類・その他で分けられている。家の敷地内、特に道路の近くに各家庭の大きなゴミ箱があり、リサイクルできるものを週１回, その他は週２回､そこまで収集車がゴミを取りに来て回収する。

・町中やスタジアムのごみ箱はリサイクルできるものとそうでないものに分れている。スーパーや市役所にリサイクル専用のごみ箱があった。

・スーパーには 100%リサイクルのスプーンやフォーク、ナプキンなどが無料配布されていた。それらがある所には、地球温暖化を警告するような張り紙があった。

・電気自動車は、日本よりとても普及している。ショッピングモールには充電できる場所があった。ヒューストン市の家庭においてのソーラーパネル普及率が低い。

［ゴミの分別（公共施設）］

［ﾘｻｲｸﾙｽﾌﾟｰﾝ・張り紙］

［電気自動車の充電（ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞﾓｰﾙ）］

・子供を預かる学校での給食は時間に厳しく時間が過ぎると食べ物は処分された。一方外食では、の暑い時期でも希望すれば食べ残したものを自己責任で持ち帰ることができた。

［学校の給食・外食時の持ち帰り］

【感想】

Co2 削減の取り組みについて、それぞれの風土や国民性が現れていると感じた。
土地の広いアメリカでは、自転車や公共交通機関の積極的な利用は限定され、電気自動車の普及率が日本よりも高いと感じた。またアメリカは、今の生活基盤を第一に、個々が考えやれることをやる。国を挙げて取り組むというよりは、個を尊重し、まずは今の基盤を崩さない、そんな姿があるように見受けられた。基盤はしっかり保つが、それぞれの考えを尊重している。

一方で、日本は小さい頃からの教育において、エコ活動等の意識づけがされていたり、法律（資源循環の促進等に関する法律など）ができたり、エコな取り組みをやると補助金が出たりと、子供への教育や国からの後押しもあり、意識づけがされ、一人ひとりができる範囲でできることをやっている印象を受けた。

実際は周りとの協調性を大事にする日本人と、個々の意見を尊重しあうアメリカ人。この国民性がエコ活動の内容につながっているのではないかと思った。今後は、もちろん、お互いやっていることを共有し、何ができるか常に考えていくことは必要だと思う。けれども、無理をしたらエコ活動は続かない。だから例えば、住環境に対していえば、今の基盤は維持しつつ快適さを求めるアメリカ人には、住宅に快適に過ごせる ZEH 住宅を推進していく。土地が狭く周りとの協調性を尊ぶ日本人は、周囲も取り入れ、補助金も出る太陽光パネルの方を推進していく。そんな風に国民性や、その土地の風土や基盤を考え、広めていくのが良いのではと感じた。
そして、何よりも国を越えて一人一人が自分の問題としてこのことについて関心を持つことが何より大切だと思った。どんな国民性であっても、まずは知らないと始まらない。そのために、日本はアメリカに倣いもっと SNS などを通じて認知を深める。アメリカでは、低学年のうちから学校でもこれについて取り扱うなど、まずは両国での学びの機会の差異に次への取り組みへのヒントがあるのではと思った。これについて、今後の課題としてもう少し深く探っていけたらと思った。

アメリカの食

加藤　葵

【テーマ選考理由】

私は幼いころから食べることがとても好きだったため、日々学校やレストランなどで多くの食べ残しがあるということを悲しく思っていた。今回のヒューストン派遣にはHouston Food Bank でのボランティア参加や、アメリカのスクールランチ、ホスト家庭での食事の経験など、食品ロスにつながるような体験がたくさん盛り込まれていた。そこで日本とアメリカの食品ロス事情について調べてみたいと強く感じた。

【調査方法】

・アンケートを作成し、ヒューストンの学校、日本の学校、それぞれで実施する。

・現地での体験

【アンケート調査の対象】

・River Oaks Baptist School（ROBS）の生徒 29 名

・稲毛国際中等教育学校の生徒 40 名

【調査結果】

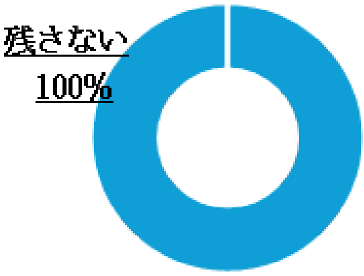
１．ドギーバッグについて

アメリカのレストランで提供される料理の量はとても多く、食べることに自信のある私でも食べきることができなかった。すると店員が「Do you want to take it home？」と聞いてくれた。「Yes」と答えると、右の写真のような容器が渡された。(写真１)この容器に入れて料理を家に持ち帰ることができた。

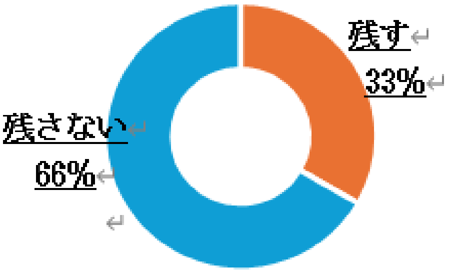
（写真１　ドギーバッグ）

質問①「カフェやレストランで食べきれない量が出てきたらそれらをその場に残しますか？」

ROBS の生徒



稲国の生徒



ROBS の生徒で料理をその場に残す人は 0/29 人。稲国の生徒も、残さないと答えた人が過半数を超えているが、二つを比べてみると差は明確。おそらく稲国の生徒が食べ物を残さないのはドギーバッグを使っているからではなく、全て頑張って食べきっているのだろう。

質問②「なぜ料理を残さないのですか？」（ROBS の生徒対象）

・家に持ち帰ることができるから　・・・９３％

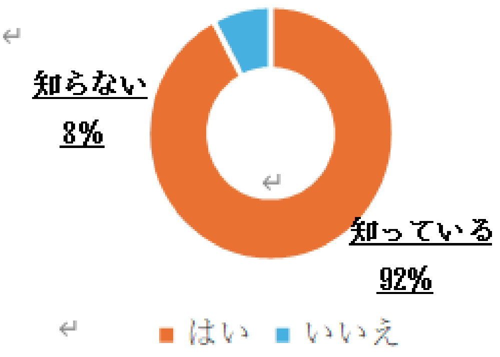
・その他　　　　　　　　　　　　・・・　７％

ROBS の生徒はドギーバッグをうまく使用し、持ち帰った料理を家で食べていることがわかった。

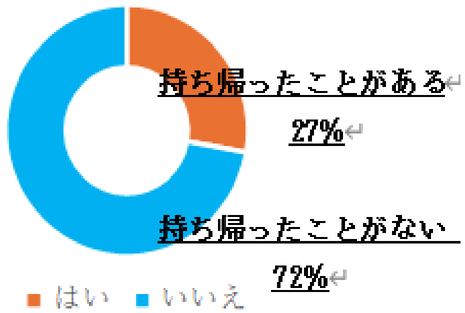
質問③「ドギーバッグというものを知っていますか？」（稲国の生徒対象）

質問④「ドギーバッグで料理を持ち帰ったことはありますか？」（稲国の生徒対象）

質問③



質問④（③で「知っている」と答えた人対象）



私の学校でドギーバッグを知っている人は全体の 90%を超えていたが、実際に使ったことがある人はその中の 30%にも満たなかった。また、料理を持ち帰ることに対する考えを聞いたところ、フードロス削減でいいと思う、料理が無駄にならない、おなかを壊しても自己責任である、抵抗感がある、といった意見がでた。

２．フードバンクについて

滞在時、Houston Food Bank にてボランティア活動を行った。現地では子供も大人も関係なく、多くの人がボランティア活動に参加していた。一緒に活動したホストシスターたちも学校を通じて体験に参加したことがある。

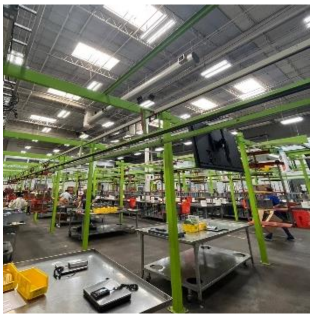
質問⑤「フードバンクという施設を聞いたことがありますか？」（稲国の生徒対象）

・聞いたことがある・・・２５％

・聞いたことがない・・・７５％

また、千葉市にもフードバンクがあることを知っていた生徒は 5/40 人だった。

普段から余った食品のその後や、フードバンクについての活動を知る機会が少ないところが結果に影響していると考える。



←写真２・３→

（Houston Food Bank にて）

３．スクールランチについて

	共通点	相違点
ROBS	・日替わりメニュー ・決められた班で食べる	・ビュッフェ形式 ・食べ始めるタイミングは自由
稲国		・係や当番が配膳を行う ・みんなで「いただきます」を言う

一番の違いは料理のとり方だ。

ROBS の生徒は、食べたいものを食べたい分だけをお皿にのせていた。ホストファミリーの家でも大皿で料理がでてくるため、ホストブラザーやシスターは自分の分だけをとりわけてたべていた。普段から「自分の分は自分で」という考えが定着していた。

写真 4（ROBS ランチコーナー）

	日本の給食	ROBS のスクールランチ
メリット	・栄養・野菜を取りやすい	・自己判断能力が養われる
デメリット	・体調に合わせることができない	・栄養が偏る ・自己管理できないと逆に食品ロスが増える

日本の給食は適切に栄養を摂取できるというメリットが挙げられるが、体調が悪い時に食べきれず残してしまう、というデメリットがある。また、ROBS のスクールランチのメリットは小さい時からの自己判断能力が養われるところだが、自己管理ができないと逆に食品ロスが増えてしまう。実際の ROBS でのランチタイム後の様子を見てみても、食事の時間が短かったからか、自分でとった料理を食べきれていない生徒が多く、たくさんの食品が捨てられてしまっていた。

【まとめ・感想】

今回、日本とアメリカの食品ロスに関する調査を行い、現状と今後の課題が明らかになった。現在、私の学校では、ドギーバッグを利用したり、フードバンクについて知っている生徒は非常に少ない。一方で、千葉市内では様々な取り組みが進められている。例えば、蘇我にある「フードバンクちば」では、平日に 4 日ボランティア活動に参加することができる。私も長期休みを活用して、「フードバンクちば」のボランティアに参加する予定だ。友達も誘い、彼らのフードバンクへの関心を高めたい。身の回りでどんな取り組みがあるかを知ることが食品ロス削減の一歩となる。誰か一人がボランティアに参加したり、料理を持ち帰ったりするだけでもいい。まずは私たちが少しずつ意識を変えることで、この問題の解決に貢献することができるだろう。

日本とアメリカのお留守番事情

守　晶羽

【テーマ選定理由】

この派遣にあたって、アメリカのことについて調べていた時に、アメリカには「原則、子供は一人でお留守番をさせない」という法律があることを知って、私自身、お留守番をする機会が結構多かったので、現地の家庭ではどのように対応しているのかが気になったため。

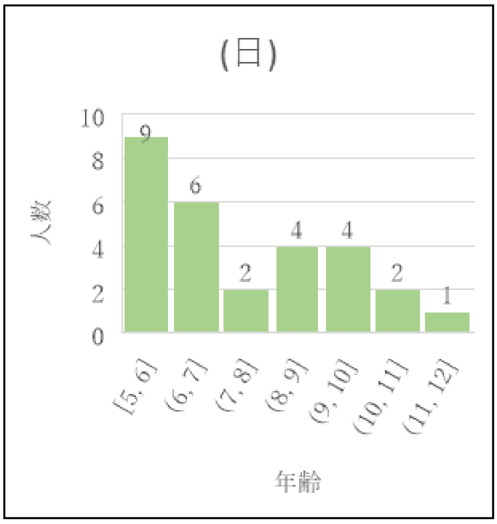
【調査方法】

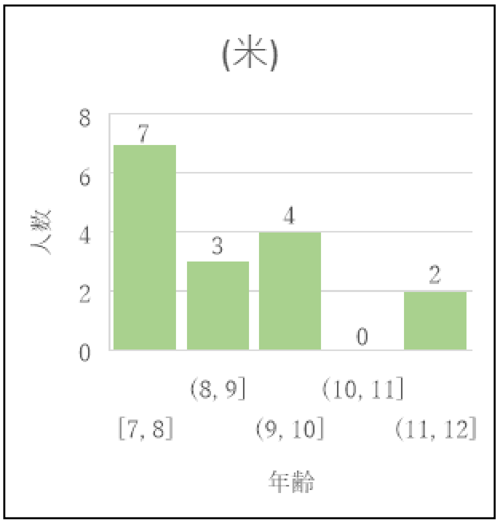
・アンケート　　稲毛国際中等教育学校３年３組　31 名
　　　　　　　　River Oaks Baptist school　　17 名

・文献調査

【結　　果】

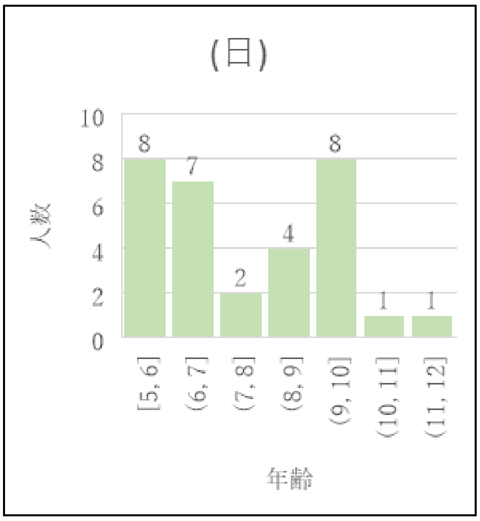
１．日本、アメリカそれぞれで、何歳で初めてお留守番をしたかのアンケートを行った結果、以下の通りになった。

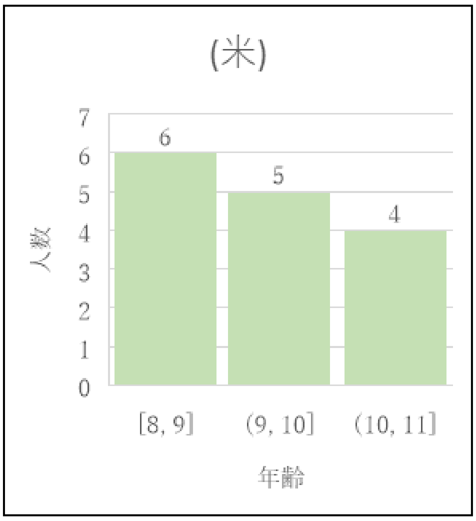




AVE　　7.8 歳　　8.9 歳

このグラフから、全体的に日本の方が早くから一人でのお留守番を経験しているとわかる。同様に、それぞれ何歳から一人でお留守番をするのがいいと思うかについても調査した。





AVE　　　　　　8.1 歳　　　　　　　　　　　　9.7 歳

なぜこの年齢がいいと思うかを更に調査したところ、理由として、
日本→自己管理能力がつくから、小学生だから
アメリカ→大人びてくるから、責任感が持てるようになるから
などが挙げられた。

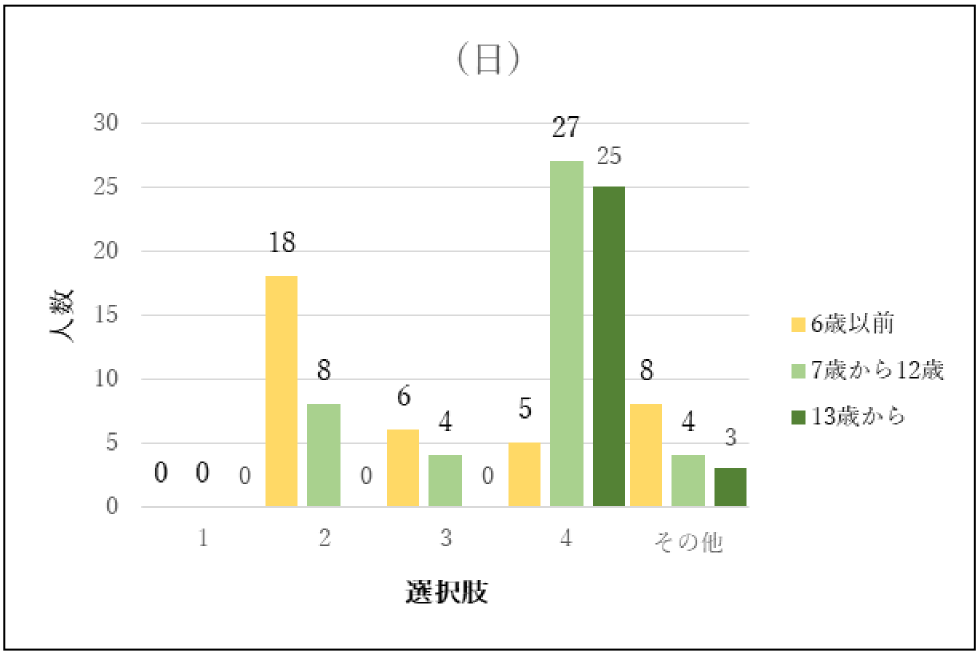
2．文献調査

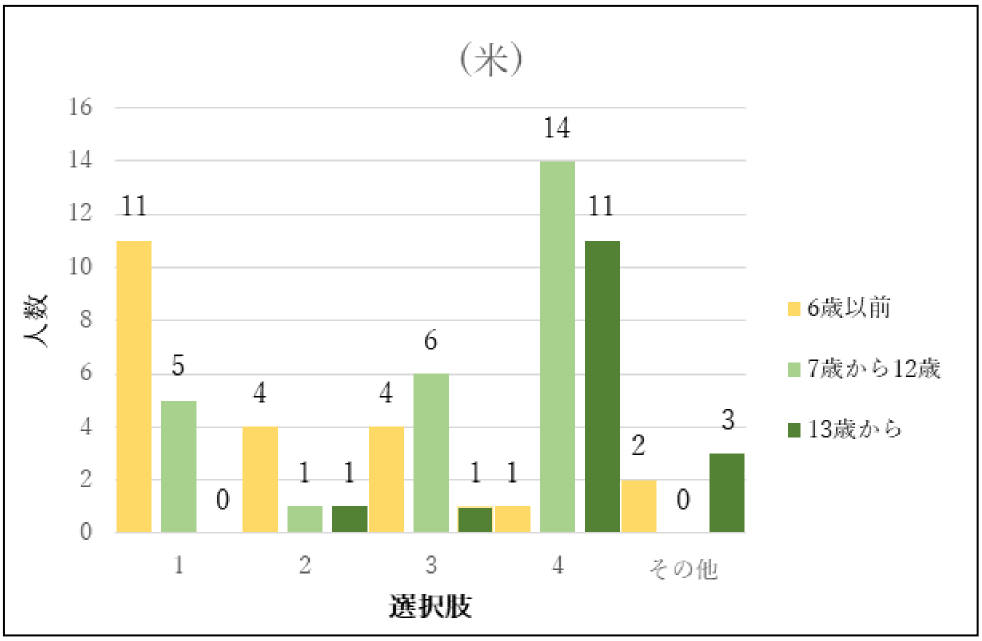
後から詳しく調べたところ、テキサス州には、「何歳から」という明確な制限はなく、アメリカ国内でも、年齢を制限している州は 13 州のみだった。
しかし、アメリカには、Child Protective Services(CPS)という政府機関があり、テキサス州では、Department of Family and Protective services (DFPS) として運用されている。

DFPS によると、子供だけでお留守番させる前に次の事柄を考えて欲しいと言っている。それは、子供の実際の年齢だけでなく精神年齢、家の中に置いてある物（家具を含めて）の配置は危なくないか、もし何か起きたら緊急の対応ができるか、精神的なまたは身体的な障害を持っているかである。

3．また、それぞれ 6 歳以前、7 歳から 12 歳、13 歳から今までの間での親がいないときにどうしていたのかを調査した。

選択肢　1，　ベビーシッターに預けられていた
　　　　2，　保育園、幼稚園、または学童に行っていた
　　　　3，　兄、姉が面倒を見てくれていた
　　　　4，　1 人でお留守番





日本とアメリカを比べた時に、アメリカでは「ベビーシッターに預けられていた」と回答する人が多く、6 歳以前での結果では最多となっている。しかし、日本では全年齢で 0 人であった。

【まとめ】

初めてお留守番をしたことがある年齢が日本の方が 1 歳ほど早かった。しかし、両国ともにお留守番をする年齢については自分が実際にお留守番をした年齢でいいと思っていることがわかった。

　また、日本ではベビーシッターに預けられた経験がある人がいないのに対して、アメリカでは、多くの人がベビーシッターに預けられたことがあった。

【考　察】

日本では、多くの子供は幼稚園、保育園、または学童に預けられることが分かった。

アメリカではベビーシッターが広く普及しているため、日本よりも１人でのお留守番を始める年齢が遅くなったと考える。

日本で、子供を幼稚園、保育園、学童に預けられなかった場合や、少しの時間だけ家を空ける時など、今のままでは、子供は一人でお留守番をせざるを得なくなってしまう。

そこで、子供の福祉の観点から、日本にもベビーシッターなど、子供を預かってもらえる制度をもっと広めていくべきだと思った。

引用

Texas Department of Family and Protective Services ホームページ

DFPS - Texas Child Protective Services (CPS)

日本とアメリカの家族に関する比較調査

山口　想蒔

【テーマ選定理由】

私の家族はとても仲が良く、集まってよく会話をします。家族は人の人格形成に深く関わっていると思います。アメリカという国をよく知るために、最も小さい社会である『家族』を調べてみたいと思　いました。

【研究内容】

アメリカの家族構成や会話をする時間について調査する。

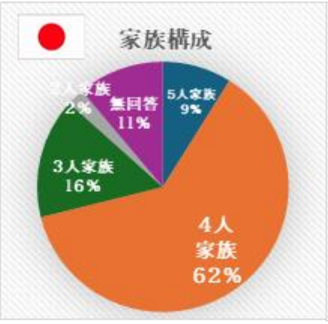
【研究方法】

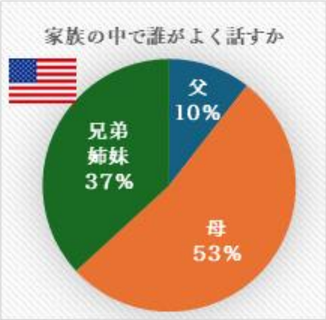
自分が在学する中学の 3 年生 44 名、ホームステイ先の ROBS に在籍している中学 2 年生（9th grade）20 名に対しアンケートを行い共通点と相違点について考察する。

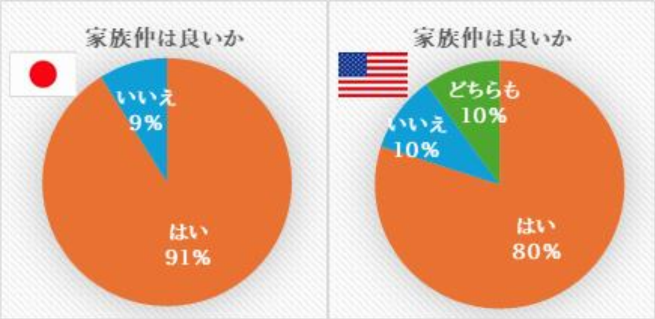
＜アンケートの質問内容＞

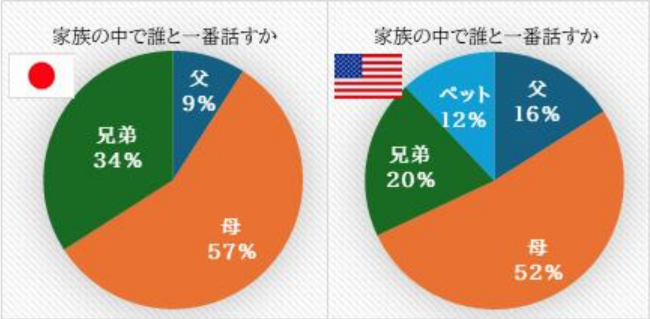
①家族構成を教えてください
②家族の仲は良いですか？
③家族の中で誰が一番よく話しますか？
④家族の中で誰と一番会話しますか？
⑤1 日に家族と話す時間はどれくらいですか？
⑥どのタイミングで家族と一番話しますか？
⑦悩みを話せる人が家族にいますか？
⑧家族内のムードメーカーは誰ですか？
⑨家の中で一番好きな場所はどこですか？
⑩家族で大切にしているイベントはありますか？

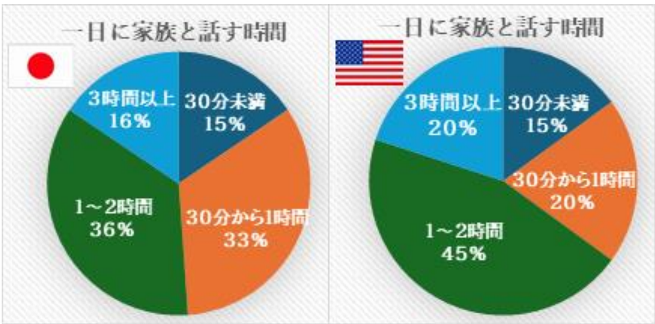
【結果】

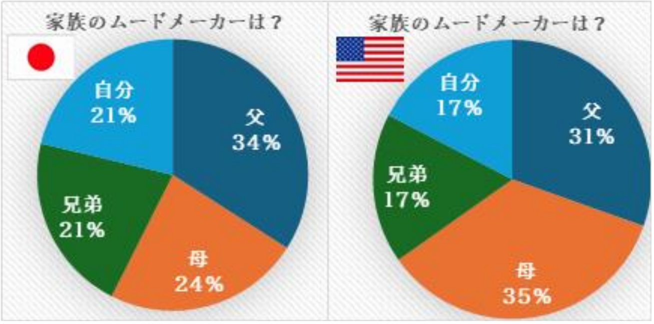


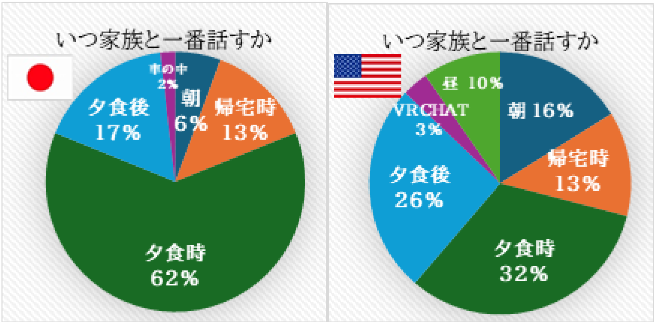


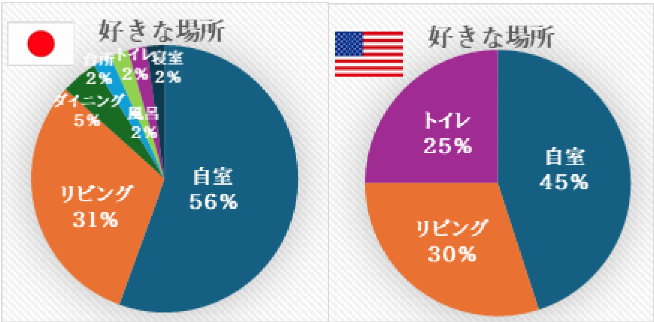


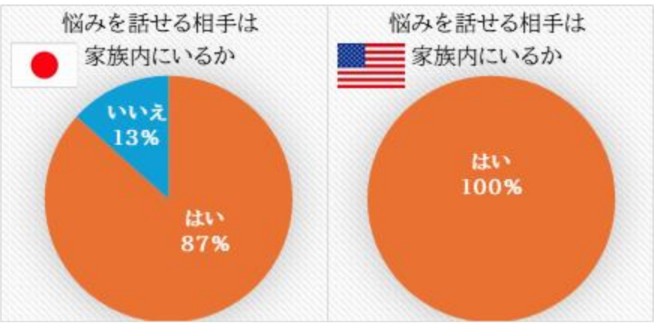


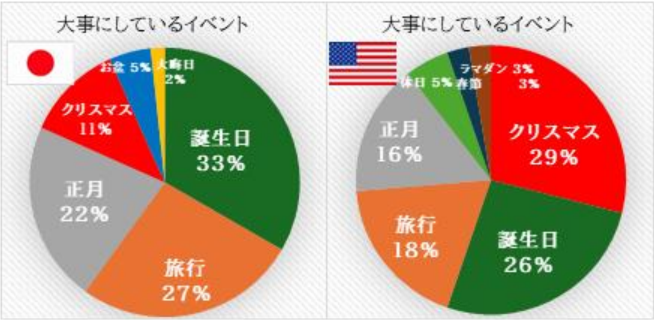












【考　察】

日本とアメリカの家庭の比較

共通点）

✓母親がよく話し、ムードメーカーである。

→母親の偉大さ・大切さを痛感いたしました。

✓日本もアメリカも多くの人の好きな場所は自室のようです。

→どちらの国も半数ほどは自室が好きで、1/3 はリビングが好きなようです。

✓両国のムードメーカーの傾向は似ていました。

→父、母、兄弟、自分、といずれもほぼ同じでした。

✓家族仲は日本もアメリカも八割が良いと答えました。

→家族仲が悪いと答えたのはどちらの国も一割でした。

相違点）

✓ ROBS の家族は構成人数が日本より多かった。

→日本は 4 人家族が過半数なのに対してアメリカでは、5 人以上の家族が過半数であり、7 人以上の　家族が 1/4 でした。

アメリカは土地が広く、家も大きいため、大人数で生活できる環境がある。

また、子連れの再婚率が高いため、家族の構成人数が多い印象を受けました。

✓アメリカでは日本に比べて家族と会話する時間が多い。

アメリカの家族のほうが話している時間が長く　アメリカは 6 割の学生が家族と話す時間が 1 時間以上でした。

→アメリカでは未成年が外出するときに、必ず親、或いは保護者が車で送迎します。送迎時にも家族と関わる時間があり、会話をする時間も日本に比べ多くなっていると感じました。

✓日本では夕食時によく話すのに対して、アメリカでは家庭によって話すタイミングは様々でした。

→日本人は自室にいることが多いがアメリカ人はリビングにいる場合が多いので会話する時間が長くなるのではないかと思いました。

また、ＲＯＢＳや家庭内では食事の時間が日本に比べて短いと感じました。

✓アメリカではクリスマス、誕生日、旅行の順番で大事にしているのに対して、日本では誕生日、旅行、正月の順番で大事にしている。

→日本では 3 位に正月が入り、アメリカでは 1 位にクリスマスが入っていることから、国による宗教間の違いが出ていると感じました。

また、アメリカのグラフではラマダンや春節を大事にしている人もいることから、ＲＯＢＳには多様な宗教を持つ人がいるのだと改めて実感しました。

✓日本とは違い、アメリカではペットに悩みを話す人が一定数いるようです。

●その他で気になったこと

アンケート用紙の使い方

→日本ではアンケート用紙に書かれた質問を黙々とただ回答するだけの生徒が多かったのですが。アメリカの生徒にアンケートを回答してもらうと、『Thank you!』やごく少数ですが絵を描いてくれる生徒もいました。

アンケート用紙に対する自由度も日本とアメリカで違いが出ていることに驚きました。

【回答の仕方】

→私は今回のアンケートを作成する際に、選択肢の前に点を置き、その点を丸で囲んで回答してもらう形式にしました。しかし、アメリカで実際に回答を集めたところ、ほとんどの生徒がその点の中にチェックマークを入れていました。回答方法の違いでも日本とアメリカの違いが出たことに驚きました。

【感　想】

両国の家庭に関するアンケート比較調査をしたことで、アメリカの家庭の実態がより身近に感じられました。

ヒューストンは想像以上に人も食べ物も建物も大きくて驚きました。

事前にインターネットなどで、ヒューストンやアメリカについて調べていたのですが、実際にROBSなどを訪問し、『アメリカ人』では無く、個人個人と友人となり交流する事で、『違うところもあるけれど、同じ年代の人間として似ているところも沢山ある』と気づけたのは非常に貴重な経験となりました。少し大げさですが、こういう交流が、ひいては世界の平和につながるのではないかと思っています。

アンケートの結果は数値でしか無く、その人個人を表しているものではもちろんありません。『百聞は一見に如かず』とも言いますが、調べたり、データを見て理解をした気になるのでは無く、実際に赴き、体感する事が異文化を理解する為には大切であると思いました。

４．滞在感想文

ヒューストンで学んだこと

雨宮　幸輝

僕はこの夏初めて海外に行った。初めての海外旅行、しかもホームステイ。始めは不安で緊張していた。それは、本当に自分の英語が通じるのか不安でもあった。最初飛行機で 13 時間。アメリカの航空会社なので乗務員も外国人だ。そこで話されている英語は早く、驚いた。そして到着後始めに協会に行きホストファミリーと初対面した。緊張はしていたが、とにかく話すことで精一杯だった。しかし、その後ヒューストンで有名な TEXMEX を食べに行きそこで話しているうちに段々親しくなっていった。その次の日からは予定通りにフードバンクやNASA、野球場、museum など観光した。そして休日は、ホストファミリーとみんなでプールに行ったり野球を見に行ったりとても貴重な時間だった。また、最後二日間は現地の私立の学校に行った。

こんなヒューストンでの日々。僕にはたくさんの新しい発見があった。それは日本とは異なる点もあったし、同じ点もあった。その中で特に印象に残ったことをいくつか書こうと思う。

一つ目は食べ物だ。朝食ではパンケーキやマフィン、ワッフル、シリアルなどパンはあまり食べなかったが小麦粉を使った料理が多かった。ライスも時々食べたが、基本的にタイ米のような細長く水分の少ない米だった。また、ホストは食事の際に栄養素を考え、特にタンパク質を多くとるように気にかけていた。そのため、シリアルも日本にはないひよこ豆からできたものだった。また、僕はハンバーガーが好きで滞在中に 7、8 回食べた。一番印象にあるのは全てにおいて大きさが大きいことだ。それは、食べ物だけではない。建物や人々など日本に比べてとても大きくて驚いた。

二つ目は人々だ。ヒューストンの人々はとてもフレンドリーで自分から話しかけてくれる。それはホストファミリーや協会の方々だけでなく店員や学校の友達なども同じだ。そのおかげですぐ仲良くなれたし会話がとても弾んだ。日本ではコンビニやファミレスの店員などとプライベートな話をすることはほとんどなかったので驚いた。

三つ目は宗教だ。僕はほとんど宗教に関わったことがなかったが僕のホストファミリーはキリスト教の方で、食事前に必ずお祈りをしていた。また町の中にはいくつもの教会があり日本に比べてその数が圧倒的に多かった。そんな中、僕は日曜日の朝に教会に連れてってもらった。最初に地域のバンドがキリストに関係ある歌を演奏しそれに合わせて人々が賛美していた。祈るのかと思っていたので驚いた。その後 1 人の男性が聖書に基づきイエス＝キリストのエピソードについて 40 分ほど話していた。彼の話はとても興味深く人を惹きつける話し方だった。そして、その後またバンドの人たちが演奏しみんなで讃美歌を歌い、それはコンサートのように楽しい雰囲気だった。

最後に学校についてだ。僕の中学校も今回の研修で訪れた ROBS も私立の学校だ。しかし、違う点も多くあった。例えば授業の受け方。ROBS では毎限クラスが変わるというのもそうだが僕が驚いたのは授業や宿題でパソコンを使うことだ。特に数学では一人一人のパソコンの中に教材がありそれを使って受けていた。また、食事はクラス全員ホールでバイキングのように自分で食べる物を決めることができた。ただ、食べられる時間が決められ、それがとても短く驚いた。

ヒューストンにおいて普段と全く違う環境の中で過ごしていく中、様々な新しい発見があった。それは僕にとって新鮮で衝撃的で、それは想像もしていなかった全く違う世界に来たかのようだった。とても楽しかった。長いようであっという間の 12 日間だった。帰国後、僕の世界観は大きく変わった。このような体験ができたのは協会の方々やホストファミリーなど様々な人のおかげだ。それを忘れず感謝して将来に繋げていこう、そう強く思った。

To study in Houston

Koki Amemiya

This past summer I went abroad for the first time. I was very nervous because everything was new including home stay. At the same time, I was very excited and learned so much.
I discovered many things in Houston. Some similar to Japan and some very different. I'm going to share some things that particularly impressed me.

First, food. I thought I'd eat lots of bread, but for breakfast, there were many dishes using flour such as pancakes and muffin waffles. And sometimes I even ate rice! but it was long and thin rice with little moisture like Thai rice.
It's nothing like Japanese rice. Also, I ate hamburgers 7 or 8 times during my stay. I'm surprised everything is much bigger than Japan. For example, buildings, pools, drinks, and people, everything is very big.

Secondly, people. The people of Houston are very friendly. Not only host families and associations, but also clerks and school friends. It is easy to quickly make friends.

Third is religion. I don't know religion well. Yet my host family is a Christian and I was brought to church on Sunday morning. First local bands played songs related to Christ, and people praised them. I was surprised because I thought they would pray. After that, a man told about story of Jesus for about 40 minutes.
His story was very interesting to me. We pray the same as in Japan, but I was surprised to pray before eating. In addition, there were many more churches than in Japan.

Finally, school. At ROBS, classes change every term, but what surprised me was that we used a computer for classes and homework. Also, the whole class ate in the hall and was able to decide what to eat by themselves like a buffet. I was surprised that it was quite a short time to eat.

Spending time in Houston was fresh and very enjoyable for me. I spent 12 days in different areas all over the city. By the time I returned to Japan, my worldview changed greatly. Thanks to various people such as the association and host families, it has become a big step in my growth in learning. I am thankful for those people and I will do my best to have more of these opportunities in the future.

たくさんの笑顔が生まれた 10 日間

加藤　葵

たくさんの人と話し、いろいろなものを食べ、多くのことを学んだヒューストンでの 10 日間。この経験は国際交流への関心をより高め、私の世界を広げてくれました。

ホストファミリーとの対面の日。最初はとても緊張していました。英語が通じなかったらどうしよう、ホストブラザーやシスターとうまく話せるだろうかと、とても不安でした。自己紹介を終え、ホストファミリーと同じテーブルに着くと、満面の笑みで「Hi! We are very happy to see you!」と温かい言葉をかけてくれました。その瞬間、私の心の中はこの 10 日間への希望でいっぱいになりました。初日からファミリーとたくさんの会話を楽しむことができました。彼らが日本旅行をしたときの話や、それぞれの好きなものについて話し、お互いをよく知ることができました。まるで本当の家族のように時間を共有することで自然に笑顔が生まれました。日本が大好きなホストシスターとはおそろいのキティのＴシャツを購入し、ホストブラザーとは一緒にマリオカートで遊んだりしました。日本に興味を持ってくれて嬉しかったです。

River Oaks Baptist School にはホストブラザーと一緒に行き、授業を受けました。スペイン語の授業もあり新鮮な体験となりました。P.E.の授業では男女別で分けられたため、彼とは別々のクラスとなり、集合場所もわからず、とても焦ってしまいました。しかし、クラスメイトの女の子たちが話しかけてくれたおかげで、不安がふっとびました。彼女たちのフレンドリーさにとても感謝したいです。

ついにホストファミリーと別れる時がやってきました。たくさんの笑いを提供してくれて、たくさんのお土産をくれて、最後まで笑顔を絶やさずにいてくれたことに心から「ありがとう」と伝えたいです。

私は今まで学校を通じてホストファミリーを経験してきました。これまでは受け入れる側として活動してきましたが、今回受け入れてもらう側となり、彼らの気持ちをよく理解することができました。また受け入れる機会ができたら、ヒューストンで受け取った優しさを返していきたいと思います。

最後にこの青少年交流事業において私たちをサポートして下さった千葉市国際交流協会、JASH、ROBS の先生方と友達、ホストファミリー、引率してくださった根本先生、ヒューストンでの時間を共に過ごした仲間、そして私の家族に心から感謝いたします。

ありがとうございました。

10 Days Filled with Smiles

Aoi Kato

During the 10 days I spent in Houston, I talked with many people, ate a lot of different foods, and learned many things. My interest in international exchange was increased by this experience. My world was expanded.

On the day I met my host family, I was very nervous. I was worried about my English communication with my host family, and I wondered if I could talk well with my host brother and sister. After introducing myself and sitting at the same table with the host family, they smiled warmly and said, "Hi! We are very happy to see you!" At that moment, I was filled with hope for the next 10 days. From the first day, I was able to enjoy talking with my host family. We spent special time to know each other, talking about their trip to Japan, and our favorite things. It felt like we were a real family, laughing together. My host sister, who loves Japan, and I bought matching Hello Kitty T-shirts. My host brother and I played Mario Kart together. I was happy that they were interested in Japanese culture.

I also went to River Oaks Baptist School with my host brother and took classes with him. I joined a Spanish class, which was a new experience for me. In the P.E. class, we were separated by gender, so I got a little nervous when I couldn't find the meeting spot. But some girls in the class talked to me. All my worries were just gone then. I appreciate their friendliness.

Finally, it was time to say goodbye to my host family. They gave me many laughter and many gifts. They always smiled for me. I want to say a big "thank you".

Until now, I had experienced being a host family through the exchange program of my school, but this time, I was accepted as a guest. and I was able to understand their feelings. If I have the chance to host someone again, I want to return the kindness that I received in Houston.

Lastly, I would like to express my gratitude to the Chiba City International Association, JASH, the teachers and friends at ROBS, my host family, chaperone teacher Mr. Nemoto, the friends who spent wonderful time in Houston together with me, and my family for supporting me during this sister city exchange.

Thank you very much.

家族時間

守　晶羽

私がアメリカ、ヒューストン市に行って感じたことは、家族のあたたかさです。

私がホームステイをしたお家は、想像していたよりもかなり、自分の家の３倍はあるのでは？と思うほど大きなお家でした。最初に通されたリビングでは、広いキッチンと、私をものすごく警戒している犬に出迎えられました。

その日の夕食はご飯の上にチキンを乗せたもので、アメリカのご飯と言えばピザやハンバーガー、チーズを想像していた私からすると思っていたよりも健康的で驚きました。この料理はホストファミリーが作ってくれたもので、私は５回ぐらい「何か手伝うことはある？」と聞いたのですが、「ゆっくりしていて」と追い返されてしまうので、犬と仲良くなろうと奮闘することにしました。料理中のホストファミリーを見ていると、家族全員で料理をしている姿が目に入りました。私の家のだと、基本的に母が、時々父がご飯を作るという感じで、どちらも１人でキッチンに立つというのが普通でした。もちろんキッチンの広さもありますが、家族で楽しく料理をしている姿を見ていると、素敵だな、と思いました。

また、リビングにある食卓が、私の家よりも狭いことに驚きました。大きい家なのでもちろんリビングも広かったですが、その中にある食卓は、全員分のメインデッシュを置いたらいっぱいで、テーブルが広くないのは意外でした。しかし、だからこそ家族との距離も近く、食後もたくさんお喋りできて、あたたかさを感じることができました。他にも、向こうのお家には、“家族と一緒にくつろぐ”スペースが沢山ありました。私は、普段は１人でゲームをする、など一人で過ごすことも多いので、これからはもっと家族との時間を大切にしていこうと思いました。

最後に、JASHの皆さん、国際交流協会の方々、根本先生、派遣生のみんな、ホストファミリー、家族など、今回は沢山の方々のご協力のおかげで楽しい時間を過ごすことが出来ました。本当にありがとうございました。

Family Time

Akiha Mori

What I felt when I went to Houston, in America, was the warmth of family. The house I went to was so big, I imagine it to be about three times the size of my house. In the living room where I was first taken, I was greeted by a large kitchen and a dog that was very wary of me.

Dinner that day was chicken served on rice. Before I saw the dish, I had expected "American" food like a big pizza, a big hamburger with cheese. Therefore, I was so surprised because it was healthy. The dish was made by my host family. And I asked about five times "can I help with anything?" but they kept telling me to relax so I decided to try to be friends with the dog. Watching them cook, I noticed that they were cooking together. In my house, it is usually my mother who cooks, and sometimes my father. It's normal cooking in the kitchen alone. Of course the size of the kitchen is different, but I thought the family enjoying cooking together was wonderful.

I was also surprised that the dining table was smaller than the one in my house. Although the house and the living room were large, the dining table was not very big, just enough to put everyone's main dishes. However, this made the family feel closer, we could talk a lot after eating and we could feel warm. Also there were many spaces in the house where the family can relax together. I often spend time alone, playing games and so on, so I thought I should increase the time with my family more and more from now on.

Finaly I'd like to thank everyone related to this program. I had a great time.

Thank you very much!

百聞は一見に如かず

山口　想蒔

ヒューストンでの青少年交流事業は、違う国の文化を身をもって体験することができ、私にとって非常に有意義な機会でした。今回のホームステイがなければ、アメリカという国のことをインターネット上でしか知らず、実際に同年代の子達がどのようなことを考えながらヒューストンで生活をしているか、考える機会もなかったと思います。

特に印象に残った文化の違いは、話の仕方と聞き方です。アメリカでは、大抵の人が日本人よりも話をするとき、聞くときに全身を使っていました。身振り手振りを大げさなほど使い、相槌をしっかり打ち、表情を豊かにアイコンタクトをしっかり取っていたので、第三者から見ても相手の話をしっかり聞いていることがよくわかりました。また、人に対して褒め合う文化も日本ではあまり見ない文化に感じました。惜しげなく口と態度に出して褒め、褒められた方も日本では謙遜しそうな状況でも謙遜をせずに、自分自身の努力や成功に対して自信を持った振る舞いで、自己肯定感を強く感じました。そういう雰囲気が、私は大変好ましく感じました。

今回 ROBS というヒューストンの学校に通える機会を頂いたことで、この先もずっと関係を持ちたいと思う友人が何名か出来ました。

『アメリカ人』ではなく、個人個人と友人となり交流することで、『違うところも確かにあるけれど、同じ年代の人間として似ているところも沢山ある』と気づけたのは貴重な経験となりました。少し大げさですが、こういう交流が、ひいては世界の平和につながるのではないかと思っています。なぜなら、ヒューストンに行く前よりも、アメリカのことが、ヒューストンのことが大好きになっているからです。

今回のホームステイをきっかけに、もっと様々な国の人々と交流をして、まだ知らない文化を実際に自分の足で歩き、自分の目で見て、色々な国の良いところを沢山探していきたいと思いました。

最後になりましたが、千葉市国際交流協会の皆様、JASH の皆様、根本先生、ホストファミリー、アメリカで出来た友人、関わってくださった全ての方々、そして家族に感謝致します。本当にありがとうございました。

Seeing is Believing

Yamaguchi Soushi

The youth exchange program in Houston was an incredibly meaningful opportunity for me, allowing me to experience different cultures firsthand. Without this homestay, I would have known about America only through the Internet, and I would not have had the chance to think about how peers my age are living and what they are considering in Houston.

One of the cultural differences that particularly stood out to me was the way people communicated. In America, most people use their entire bodies when speaking and listening much more than Japanese people do. They express themselves with exaggerated gestures, nodding, facial expressions, and strong eye contact. It was clear to anyone watching that they were fully engaged in the conversation.

Additionally, I noticed a culture of complimenting one another, which feels less common in Japan. People freely praise others verbally and through their actions. Even when someone might typically be modest in Japan, they confidently acknowledge their own efforts and successes. This strong sense of self-affirmation was something I found very appealing.

Thanks to the opportunity to attend ROBS, I made several friends with whom I believe I will have lasting friendships. By connecting with individuals rather than seeing them simply as "Americans," I realized that while there are differences, there are also many similarities among people my age. This was a valuable experience for me. It might sound somewhat exaggerated, but I think that such exchanges can ultimately contribute to world peace.

I have grown to love America and Houston even more than before my trip. This homestay has inspired me to interact with people from various countries, to explore unknown cultures by walking with my own feet and seeing with my own eyes, and to seek out the many wonderful aspects of different nations.

Finally, I would like to express my gratitude to everyone at the Chiba City International Exchange Association, JASH, Mr. Nemoto, my host family, the friends I made in America, and all those who were involved, as well as to my family. Thank you very much.

運命の赤い糸

千葉市立千城台南中学校
教諭 根本 哲和(引率者)

ヒューストンへの派遣期間も終わりに近づいたある日、私は派遣生４人を連れて、River Oaks Baptist School (ROBS) を訪問した。教員同士の情報交換の中で、ROBS の教員である Dr.Cook が唐突に「『運命の赤い糸』というものを信じているか。」と尋ねてきた。話題が飛躍したため、彼の質問の意図を理解するのに少しの時間がかかった。Yes か No だけで答えても彼の関心は満たされないだろうと思い、私は中学生が習うように “Well,” などと言って少し間を取り、「私は、最初で最後の恋をして、今の妻と結婚し、今も一緒にいる。」と答えた。

ホストファミリーの主人を、私は Bill と呼んだ。彼から ROBS の訪問について尋ねられた時、私はこの運命の赤い糸に関する話をした。彼はそれを聞いて小さく笑った。心の中で大笑いしていたのか、それ以外なのか、私は知らない。

運命とは何か。未来に起こることが既に決まっていることなのだろうか。私は、それだけではないと思う。抽象的に言えば、ある出来事、つまり自分や他人の選択、自然発生的な出来事が「点」として存在し、その点と点が自分の意識を超えて、意図せずにつながり、「線」として結びつくことだと思う。具体的に言うと、私たちが何かを選択することで、未来が形作られる。私は上司の指示でこの任務に就いたが、断ることもできたかもしれない。私は、自分の選択によってヒューストンに来たのだ。私は、その選択が正しいものだったと思う。

派遣期間中に経験したことの中には、日本でも似たような体験ができるものもあった。しかし、一つ一つを注意深く振り返ると、僅かな違いを多く見つけることができた。その僅かな違いが全体を「似て非なるもの」にしているように思った。所得格差、社会保障、交通事情、災害対策、都市インフラ、人種や価値の多様性、気候や風土など、挙げればきりがないが、それらが少しずつ違うことで、すべてが異なって感じられた。

私は、Bill とその家族に温かく迎えられ、約 10 日間を楽しく過ごすことができた。本当はここで一人一人の名前を挙げて感謝を伝えたいのだが、公開される文書でもあるので控えたい。日本人家庭でのホームステイと、アメリカ人家庭にホームステイをすることの間には、共通点も多くあるだろうが、やはり僅かな違いがそれを「似て非なるもの」もする。私は以前にも一晩でバーを３か所渡り歩いたことがあるが、Bill という「運命的」に出会った人物と一緒にコーンホールやビリーヤードを楽しみながら巡った夜は特別だった。紙面の都合で一例しか紹介できないが、ホストファミリーとのすべての経験が、「運命」的な出会いによってより特別なものになったと思う。最後の夜、Bill は私に「今回のきっかけを作ったのは娘だ」と教えてくれた。私たちの運命の「きっかけ」を作ってくれたビルの娘さんに心からの感謝を込めて、この文章を締めくくる。

The “Red String of Fate”

Chaperone: Yoshikazu Nemoto

As our time in Houston was coming to an end, I took the four students to visit River Oaks Baptist School (ROBS). During a conversation with the teachers, Dr. Cook from ROBS suddenly asked, “Do you believe in the ‘Red String of Fate’?” His question seemed unexpected, so it took me a moment to understand what he meant. I figured that just saying "Yes" or "No" wouldn’t be enough to satisfy his curiosity. After pausing for a moment and saying “Well,” I replied, “I fell in love for the first and last time, married her, and we’re still together.”

I called the father of my host family "Bill." When he asked me about my visit to ROBS, I told him about the red string of fate. He smiled softly when he heard the story. Whether he was smiling because he found it funny or for another reason, I’m not sure.

What is fate? Is it the idea that the future is already decided? I think it’s more than that. In simple terms, I see fate as events—whether they are choices we or others make, or things that happen by chance—that connect together like “dots” to form a “line” beyond our awareness. More practically, our choices shape our future. Even though I was given this job by my boss, I could have said no. In the end, I chose to come to Houston, and I think it was the right choice.

During this visit, I had experiences that I could have had in Japan as well. But when I looked closely at each one, I noticed many small differences. Those small differences made the overall experience “similar, yet clearly different.” Differences like income levels, social security, transportation, disaster planning, city infrastructure, racial and cultural diversity, climate, and so on—these small details together made everything feel unique.

Bill and his family warmly welcomed me, and I spent about ten happy days with them. I’d love to thank each family member by name, but I’ll avoid that since this document is public. Staying with a Japanese family and staying with an American one have many similarities, but again, small differences make them “similar, yet clearly different.” I’ve gone bar-hopping before, but the night I spent with Bill—a man I met through what felt like fate—going from place to place, playing cornhole and billiards, was something special. I can only mention this one example due to space, but every experience with the host family felt more special because of our “fateful” meeting.

On the last night, Bill told me, “It was my daughter who made this opportunity happen.” So I end this piece with deep thanks to Bill’s daughter for creating the chance for this fateful connection.

５．記録写真（思い出の写真）

（１）雨宮　幸輝

初めてホストファミリーと会いました。
ホストファザーが積極的に話かけてくれたので気軽に話せるようになりました。

初日の夕食でテックス・メックスをいただきました。ヒューストンの有名な料理でナンのようなものに豆や野菜、肉を包んで食べる料理です。

ホストブラザーと一緒に食べた朝食です。
自分が思っていたより少食で驚きましたが、兄弟と話しながら食べる朝食はとても楽しかったです。

今回ホストファミリー全員で派遣生を招いてくれたウエルカムパーティーの写真です。すごく楽しかったです。

ホストファミリーに日本食の「うどん」「お好み焼き」「お茶」を作りました。お茶は小さな子にはまだ早かったですが皆に喜んでもらえて良かったです。

ホストファミリーとアストロズの試合を観ました。地元チームのホームランが２本も出て Minute Maid Park の電車が走ったのが印象的でした。

（２）加藤　葵

Houston Color Factory にて。 とても楽しく、仲が深まった時間でした。	モニュメントにて。初めてホストブラザーと行動した日ですが、とても仲良くなれました。
私のホストファミリーのおばあちゃんがきてくれました。インド料理を一緒に食べました。	仲良くなったホストシスターの友達とパーティ！レストランにて。
ROBS でできた友達と一緒に。たくさん話しかけてくれました！	お別れの前。ハグをしあいました。 １０日間　ARIGATO♡

（３）守　晶羽

 ホストファミリーと野球観戦に行きました。初めての球場で見る試合で、とても感動しました！	 Color factory で CHIBA と HOU の文字を作りました。みんなで協力して作ったのでいい思い出です。
 ROBS で授業を受けました。Speech and Debate という授業で、夏休み中に何をしたかをグループで話しました。	 シアターで NASA の映像を見た後に、この展示を見ました。この写真には写っていませんが、すぐ横には月の石があって、たくさん触らせてもらいました。
 ホストファミリーに日本食をふるまいました。稲荷ずし、お味噌汁、鮭おにぎり、卵焼きを作りました。日本食を喜んでもらえて嬉しかったです。	 Audery の誕生日のときの写真です。誕生日プレゼントを渡しました！いくつかのプレゼントを風呂敷に包んで渡しました。喜んでもらえてよかったです。

（４）山口　想蒔

 JASHでホストファミリーと初めて面会しました！一番緊張した日でした。	 ホストファミリー全員に着付けをしました。浴衣のサイズがぴったりで安心しました。
 偶然隣の席にいた警察官と写真を撮りました。とてもフレンドリーで優しかったです。	 ホストブラザーとアメフトを見に行きました！スタジアムがとても広く、活気がありました。
 ホストファミリーの前でお手前を披露しました。とても喜んでもらえたので嬉しかったです。	 ROBSの９年生全員と写真を撮りました！たくさんの友人ができて楽しかったです！

（５）引率者　根本 哲和

NRG スタジアムでアメリカンフットボールを観戦しました。フィールドに立たせてもらった時の迫力はすごいものでした。

Kids’　Meals の活動を体験しました。Preschool 年齢の子どもたちに食事を届けるボランティア活動です。

チェスのようにルールを共有しているゲームもあれば、同じ麻雀でも異なるルールで楽しまれているものもあります。別物です。

容器に水と粉を入れて、混ぜるとお寿司ができるというお菓子です。スシは食べないという４歳の女の子も楽しんでいました。

卓球をしました。この兄弟は、ゴルフ、バスケットボール、アメリカンフットボールなど、何でもできるのです。

ライス大学周辺をドライブ。ヒューストン最大のモールであるギャレリアやテキサスメディカルセンターのビル群もすぐ近くです。

令和６年度 青少年交流事業
アメリカ・ヒューストン市派遣 帰国報告書

発行　　　　令和６年１１月
編集・発行　公益財団法人千葉市国際交流協会
〒260－0013
千葉市中央区中央３－３－１
フジモト第一生命ビルディング２階
TEL：０４３－３０６－１０３４
FAX：０４３－３０６－１０４２
URL：www.ccia-chiba.or.jp/